

ドイツの家族政策「多世代の家」適用施設における利用者行為 と空間構成に関する研究

A Study of User Behavior in and Room Constitution of “Multi Generation Houses” in Germany

11523005 後藤あづさ
主査 篠原聡子教授
副査 石川孝重教授
副査 定行まり子教授

多世代交流・地域コミュニティ・行動観察・空間構成
multi generational communication, district community, behavior observation, room constitution

第1章 序論

1-1 研究の目的と背景

少子高齢社会の進行や核家族化により、多世代での交流の減少や地域コミュニティとの関わり希薄化を背景に、近年改めて地域コミュニティの場の重要性が指摘されている。

近年、地域との交流を求め「住み開き」や「地域共生の家」などの取り組みが見られるが、元々、コミュニティやまちづくりに関心があり積極的に活動できる層に限定されており、「誰もが、気楽に参加できる場、仕組み」とは言いがたいのが現状である。

そこで本研究では、地域交流と活性化を促すドイツ連邦政府の「Mehrgenerationen Haus（多世代の家）」の取り組みに着目し、公共空間でありながら家のように寛げるパブリック・リビングを建築計画の視点から調査・分析し、空間的観点から、世代を超えて親しまれる地域コミュニティの場の計画指針を具体的に提示することを目的とする。

1-2 先行研究における位置づけ

多世代の家プロジェクトの特徴は、パブリック・リビングと呼ばれる公共空間を持つことである。上田による既往研究¹⁾では、同プロジェクトを連邦政府のプロジェクト体制や、具体的な運営プログラムに関する分析が行われている

が、一方で、空間的な指摘はない。そこで本研究では、施設全体の運営、建物形態を把握した上で、パブリック・リビングでの利用者の行動観察調査から、空間とそこでの行為の関係を把握し、空間的特徴をまとめる点に特徴がある。

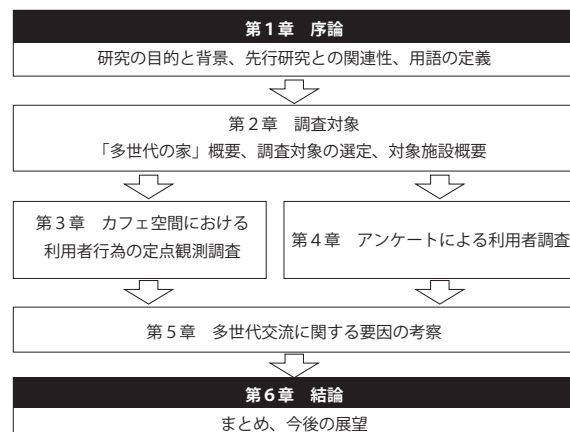
1-3 用語の定義

本研究において、次のように用語を定義する。2章のプロジェクト概要で該当する空間について述べる。 (表1-1 用語の定義)

パブリックリビング	利用者を特定せず、全ての人に常時開放された空間。教室や集会室とは異なり、機能や目的はなくそれぞれ自由に過ごすことができる。飲食は可能だが、利用者の自主性に委ねられる。
カフェ	飲食が提供されるが、食事以外(勉強やおしゃべりなど)を目的に利用することもできる。施設の食堂とは違い、一般に開放されカフェだけの利用もできる。

1-4 論文の構成

論文の構成を以下の図に示す。



(図1-2 論文の構成)

第2章 調査対象

2-1 「多世代の家」プロジェクト概要

「多世代の家」とは、ドイツの家族・高齢者・婦人・青少年省（以下、「家族省」とする）が2006年から行っている家族政策である。

家族政策とは、家庭と職業や余暇に関する課題に包括的に対応するもので、雇用や介護などの異なる世代の問題に対して個別に解決策を講じるのではなく、家族や地域という単位で考えることでそれぞれの長所を活用し、短所を補い合う関係を模索し、共に解決することを目指す政策である。概要を表2-1にまとめる。

地域ごと課題や要求が異なるため、地方行政と運営団体が主体となって施設の機能やプログラムを決定する。そのためMGHに明確な規定

はなく、規模や運営方法、機能も様々である。運営主体となる団体の起源も地域福祉や母親支援、児童福祉などそれぞれ異なり、MGHにおけるプログラムも移民の融和や生涯学習、メディア教育など多種多様である。

表2-3に政策の要点と変遷をまとめる。

2-2 調査対象の選定

施設によってMGHのもつ機能や用途は異なるが、本研究では、以下の3点から調査対象を選定し、表2-4にまとめた。

本研究では、全条件を満たす事例を4つ、3番目の多世代機能を満たさないが、2017年からのFederal Programの実験的な事例を1つ対象として取り上げた。

	コンセプト	主な目的	ポイント
2006-2011 Action Program I	Four age under one roof	異世代を一つにする	<ul style="list-style-type: none"> ・多世代交流によってスキル・経験・興味を共有し共助するという考え方の定着 ・持続可能な社会基盤の創出
	Intergenerational offers	全てのプログラムで多世代交流を促す	
	Childcare	ワークライフバランスを整える	
	Volunteering	市民の社会参加と貢献のサポートをする	
	Information and service hub spot	情報共有の場を作る	
	Involvement of local economy	地域活性に貢献する	
	Open meeting	全ての人に開いた場である	
2012-2016 Action Program II	Age and Care	高齢者の健康と自立生活の維持を支援し、認知症の患者と家族のサポートによって介護と仕事の両立を図る	<ul style="list-style-type: none"> ・雇用の創出とワークライフバランスの充実 ・求職者や片親へのサポート
	Integration and Education	全ての世代と文化背景を持つ人々に、カウンセリング、サポート、教育のプログラムを提供する	
	Household services	様々な生活状況にある人々に対して、家事の専門家によるサポートの強化をする	
	Volunteering	ボランティア活動自体が、社会復帰やサービスの発展において重要な役割を担う	
2017-2020 Federal Program	-	-	-

表2-3 プロジェクト変遷

範囲	ドイツ全土
総数	550以上
予算	年間10,000ユーロ（初年度20,000ユーロ）
開設年	2006年
目的	子育て世代の就業サポート、介護サポート、高齢者の社会参加、市民の融和と教育、ボランティアによる余暇時間の充実、地域コミュニティの再構築
システム	図2-2を参照
背景	少子高齢化、移民の増加、労働形態の多様化、ワークライフバランスの再考
対象	全ての市民
今後の課題	多世代の融和

表2-1 プロジェクト概要

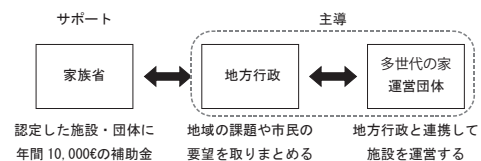


図2-2 プロジェクト運営システム

<p>都市部に位置し、多様な属性の利用者がみられる</p> <p>(現代的なコミュニティのあり方を模索するため、地縁の繋がりが強いと思われる地方より都市部が研究目的に合致すると考えたため)</p>
<p>「開かれた集いの場」となるオープンスペースで、飲食を提供している</p> <p>(飲食という目的を場所に与えることで空間の性質がわかりやすくなり、「多世代の家」という意識を持たずに近隣のカフェとして、より多様な層が気軽に利用できると考えたため)</p>
<p>「多世代」がコンセプトだけでなく施設機能に表れている</p> <p>(漠然とした居場所ではなく、幼稚園や高齢者ケアなど具体的な福祉機能が施設に組み込まれていることで、「多世代」の利用が理想から現実的なものになると考えた)</p>

表2-4 調査対象選定条件

2-3 調査対象概要




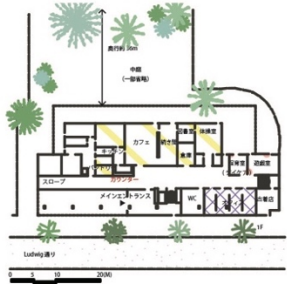

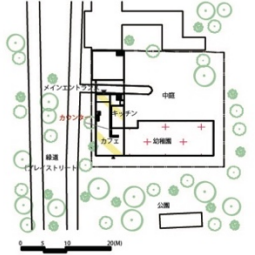

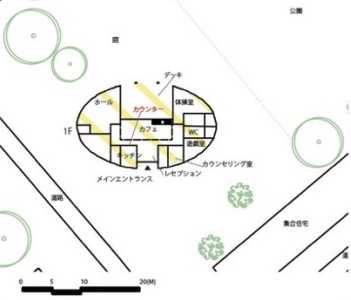

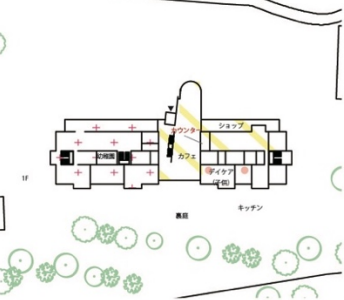
	概要		外観	GL図面
事例①	略称	Esslingen		
	運営団体	地域福祉NPO		
	所在地	エスリンゲン		
	主な機能	幼稚園・特別養護シニアホーム・運営オフィス		
	開業年	2002		
	MGH加入年	2006		
	周辺環境	郊外住宅地		
事例②	略称	Stuttgart West		
	運営団体	地域福祉財団		
	所在地	シュトゥットガルト		
	主な機能	市立幼稚園・デイケア・シェア型サ高住・運営オフィス		
	開業年	2001		
	MGH加入年	2007		
	周辺環境	都市部住宅街		
事例③	略称	SOS Berlin		
	運営団体	国際児童福祉NPO		
	所在地	ベルリン		
	主な機能	幼稚園・児童ケアホーム・運営オフィス		
	開業年	2001		
	MGH加入年	2007		
	周辺環境	工業地域住宅街		
事例④	略称	Orangerie		
	運営団体	地域福祉NPO		
	所在地	ベルリン		
	主な機能	ホール・メディアルーム・運営オフィス		
	開業年	2016		
	MGH加入年	2016		
	周辺環境	都市近郊高齢化団地		
事例⑤	略称	Salzgitter		
	運営団体	国際児童福祉NPO		
	所在地	ザルツギッター		
	主な機能	幼稚園・デイケア・ショップ・運営オフィス		
	開業年	1980		
	MGH加入年	2006		
	周辺環境	地方都市郊外住宅地		

表 2-4 調査事例概要

第3章 カフェ空間における利用者行為の定点観察調査

3-1 調査概要

MGHの特徴でもあるパブリック・リビングのカフェ形態の場合の利用者、運営者による使われ方を明らかにするために、行動観察調査を行った。調査概要は、表3-1に示す。

(表3-1 定点観察調査概要)

調査日	2016年8月10日(水)～2016年8月19日(金) のうち、平日の各1日
時間帯	各MGHのオープン時間～クローズ時間 (8:00～19:00の間)
調査内容	定点観測 行為・滞在時間・属性・グループの範囲を記録した

3-2 利用者の行動にみるパブリック・リビングの特性

1) 世代別に滞在場所が分かれる事例

SOS Berlinは、カウンターキッチンを中心にL字に広がったスペースが特徴である(図3-2)。ベビーカー置き場のあるエントランス付近に子供連れが多く座った。高齢者や若者は、食事を受け取るカウンターに近い短手の方をよく利用する傾向があった。昼間の社会人のランチ利用も多く、カウンター近くの席を選択する様子が多く観察された。このように、場所ごとの機能の違いも見られ、世代ごとに選択されやすい場所があることを把握した。

2) 滞在時間別に滞在場所が分かれる事例

Stuttgart Westはエントランス、廊下、カフェ、軒下、中庭と質の違う空間が重なっている。滞在時間が長い人は、より建物の奥(図3-3中央)を利用する傾向が見られた。

3-3 交流とそのきっかけ

コミュニティ形成に不可欠な交流という行為がいつ・どこで・何をきっかけに起こるのかグループの属性に着目して分析した。

1) 多世代の交流

一般の利用者というよりは、ボランティアや

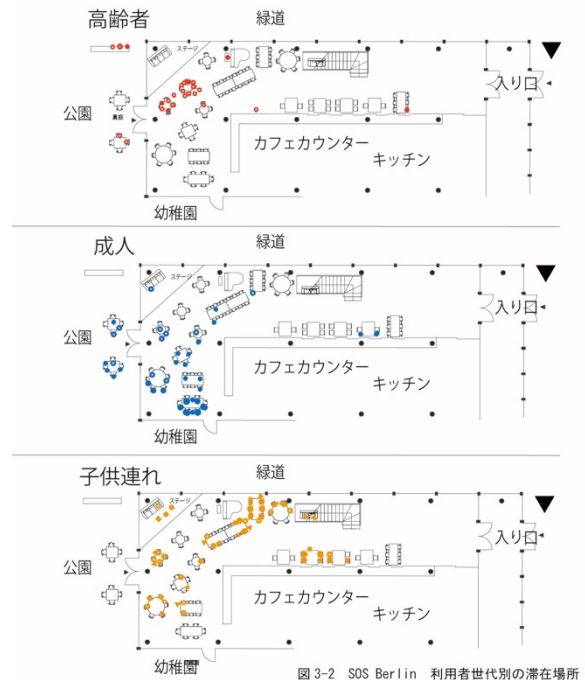


図3-2 SOS Berlin 利用者世代別の滞在場所

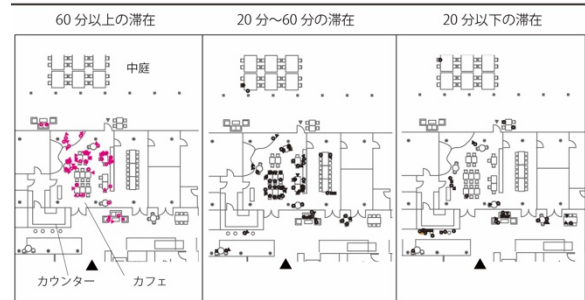


図3-3 Stuttgart West 滞在時間別の滞在場所

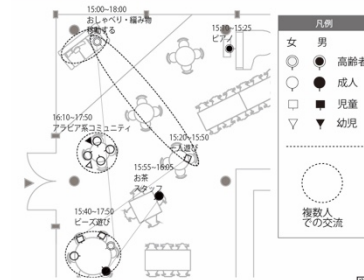


図3-4 SOS Berlin 多世代交流の例

社会参加に意欲のある中高年が他の利用者に声をかけることが多い。SOS Berlinでは、常連の高齢女性がソファで編み物をしながら様々な利用者に向けていた(図3-4)。

また、高齢者が一人にいるときや、子供たちが遊んでいるときに他の世代の利用者が声をかけるケースが見られた。

2) 高齢者同士

各々好きな時に来て好きな時に帰る傾向が見られた。その際、大きめのテーブルを利用す

ると人数の増減に対応できるため都合がいい。多くの事例で常連のグループが存在し、誰かが欠席すると連絡を取って状況を確認するというグループもあった。ランチのみですぐに帰るグループもあれば、長時間いてゆっくりお茶と会話を楽しむグループもあった。また SOS Berlin では、シニア向けの体操教室の待ち合わせにも利用されていた。



(図 3-6 高齢者の交流)

3) 子供連れの交流

子供連れには親子の場合と孫祖父母の場合があり、祖父母の場合はあまり積極的な交流はなかった。親子の場合は妊婦クラスやベビーミュージックなどで知り合い、交流が続いているケースが多かった。その場での交流は、室内のおもちゃスペースで子供同士が遊びだす (Stuttgart West)、個人で持ってきて遊んでいたプラレールに興味を持つ (後述の図 5-7) など子供をきっかけに親同士の交流が始まる様子が見られた。また移民の多い地域では、同じ人種同士の母親のグループが多く見られた。

4) スタッフと利用者の交流

プログラムを介した交流と挨拶などの偶発的な交流の2種類の交流が見られた。スタッフがランチやコーヒー、ミーティングなどでカフェを利用することで会話の機会が増えている。

またスタッフでありながら利用者でもあるというケースもあり、Stuttgart West ではデイケアで働きながら自分の子供の世話もしているという女性が、SOS Berlin ではキッチン

で働きながらカフェや外で遊んでいる子供を見守っているという女性がいた。

第4章 アンケートによる利用者調査

4-1 調査概要

MGH の具体的な利用者像と、観察からでは得られない利用実態の把握を目的として、アンケート調査を行った。調査概要は表 4-1 に示す。

(表 4-1 アンケート調査概要)

調査日	2016年8月10日(水)～2016年8月19日(金) のうち、平日の各1日
時間帯	各MGHのオープン時間～クローズ時間 (8:00～19:00の間)
調査内容	アンケート調査 定点観察と並行してドイツ語と英語のアンケートを配布し、その場で回収した

(表 4-2 アンケート項目)

アンケートの内容は表 4-2 の 10 項目である。性別の項目はないが、回収時に記録した。

1	年齢
2	就業状況
3	世帯構成
4	アクセス方法と所用時間
5	利用頻度
6	利用時間帯
7	利用目的
8	平均滞在時間
9	知ったきっかけ
10	MGHの好きなどころ

4-2 調査結果 (単純集計)

単純集計の結果を抜粋して以下の表に示す (Esslingen は除く)。

(表 4-3 アンケート単純集計抜粋)

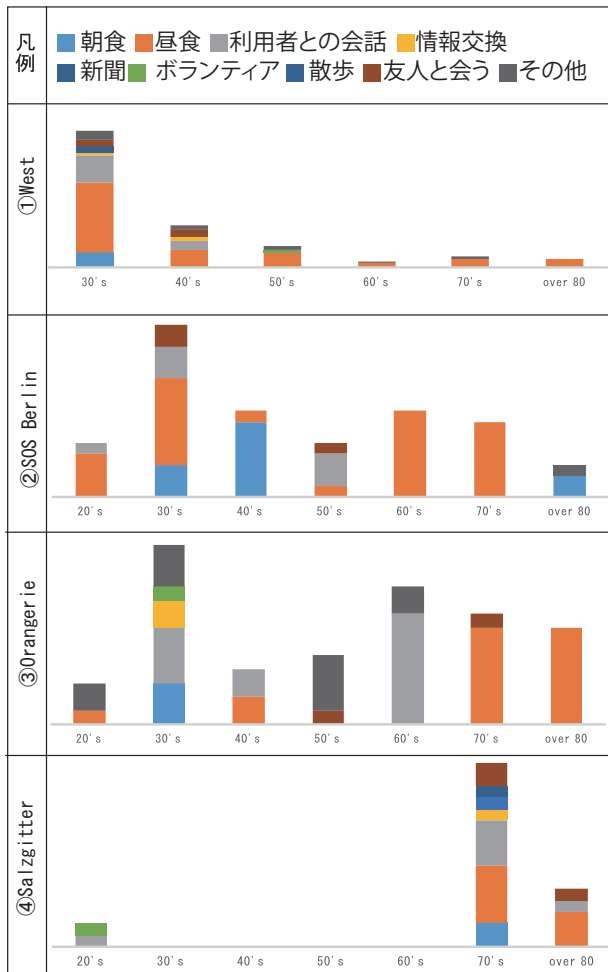
	①West	②SOS Berlin	③Orangerie	④Salzgitter
総数	55名	29名	28名	8名
男女比				
年代比				
世帯構成割合				

Salzgitter は総数が少ないが、定点観測では他事例と同等数のデータが取れたため参考として示す。

4-3 利用者像の分析（クロス集計）

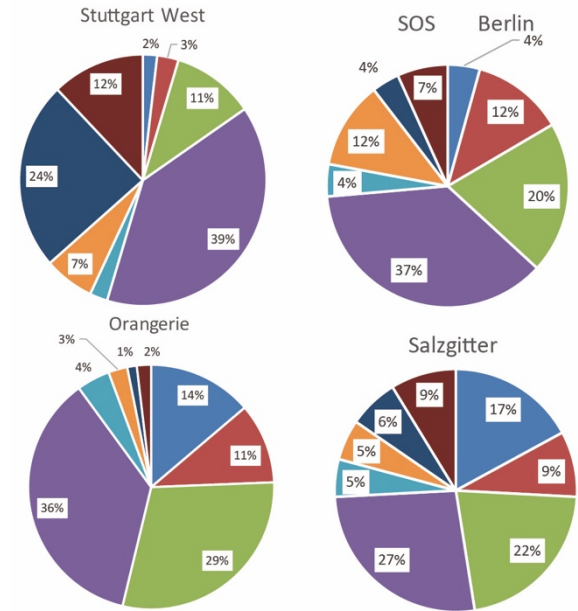
より具体的な利用者像を得るため、クロス集計を行った。表 4-4 は利用者の年代と利用目的（複数回答可）を表す。これによると、どの事例においても高齢者の利用目的にランチが挙げられる率が高い。30代は乳幼児連れの利用者が多いこともあり、交流や情報交換を求めている人が多いことがわかる。

（表 4-4 アンケートによる利用者年代と利用目的）



Orangerie は高齢者向けの用途はないが利用者の 25%が高齢者である。これは立地が高齢化団地の近くであることと、メモリートレーニングや体操などのシニア向けのプログラムが充実しているためと考えられる。

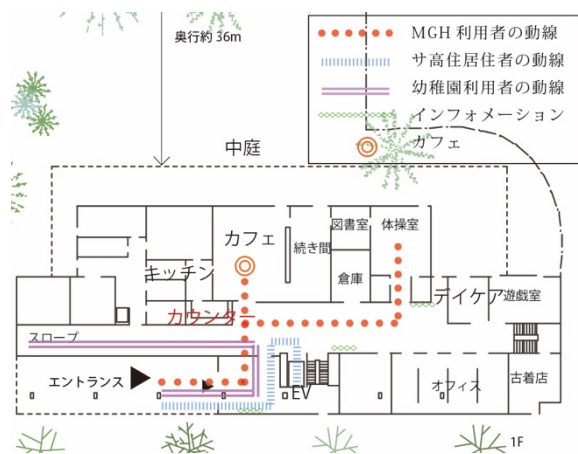
（表 5-1 定点観察調査より利用者属性の割合）



住宅などのプライベートな用途ではなく、デイケアなどパブリックな用途であることと、各世代のニーズに沿ったコンテンツがある方が、より多くの人にとって利用しやすい。

5-2 主要動線と情報とカフェ配置

各施設には、用途に対する主要な動線が存在する。今回は動線の調査は行わなかったが、施設構成から主な動線を予測した。



（図 5-2 Stuttgart West における動線と情報源とカフェ配置）

第 5 章 多世代の交流に関する要因の考察

5-1 多世代コンテンツと利用者の多様性

次の図は観察調査から得たカフェ利用者の性別と年代を割合で示したものである（Esslingen は除く）。今回調査した事例のうち、SOS Berlin と Orangerie は高齢者向けの用途を持たない。しかし図 5-1 を見ると、Stuttgart West では高齢者向けの住戸があるにも関わらず高齢者の利用が少ない。逆に

の情報が得られる場所、そして利用者が集うカフェにどのような関係があるか分析・考察する。

図5-2を例とすると、カフェを中心に動線が左右に分割しており、幼稚園やプログラムなど様々な目的で訪れる人にとカフェが使いやすい配置となっている。また情報は誰もが通るエントランスと通路上の2か所にあり、左手の幼稚園のみを利用している人には共有されない情報がある可能性がある。

このように、情報共有とカフェ利用のしやすさは動線計画に左右される。

5-3 領域の多様性

利用者とその行為に多様性を求めるには、施設が用意する空間も多様である必要がある。調査事例から異なる性質を持つ領域の例を3つ挙げる。

<可変的な領域>

可変的な領域とは、境界が変化し人数の増減やイベントなどによって一体的に使ったり区切って使ったりできる場所である。

図5-3のようにEsslingenではカフェと集会室がガラス扉によって仕切られているため、閉じたり開いたりすることで臨機応変な使い方ができる。誕生日会など個人的な催しに貸すこともあるということであった。

また、Salzgitterでは前庭に突き出す形でガラス張りの空間があり、前者とは異なり内外の領域が変化する。カーテンや窓の開閉で外部との距離を調整できる。内部でお茶を楽しむ高齢者が外で遊ぶ子供と一緒に過ごしている気持ちになれる。

どちらも透明性の高さが特徴的であり、建具を利用して透明度を調節できる。

<中間的な領域>

中間的な領域とは異なる2つの性質、例えば内部と外部、静かと賑やかななどの両方の面を持っているバランスのよい場所を指す。今回の調査ではStuttgart Westにおいて中間的な領域



図5-3 Esslingen 可变的空間



図5-4 Salzgitter 可变的空間



図5-6 Stuttgart west 中間的空間



図5-7 SOS Berlin 特徴的な空間

が作られていた。この通路は幅の広さと吹き抜け、また街路に面した部分がガラス張りになっていることによって屋内でありながら広がり

(表 5-9 多世代交流に関する要因)

対象	ソフトに関する要因		ハードに関する要因	
全年齢	4章	幅広い対象のプログラム 例：クラフト、PC教室	5章	ユニバーサルデザインのアプローチ空間
	5章	公共交通機関でアクセスできる	5章	多様な領域を持つ 可变的：続き間、透明性 中間的：内部と外部の性質を併せもつ 特徴的：豊かさ、個性
	5章	情報をオープンにする（Web、掲示など）	5章	可動イスや大きなテーブルなど大人数で利用しやすい家具と、少人数で利用する家具の両方がある
	5章	利用者がコンタクトを取りやすいようスタッフも「開かれた集いの場」を使う	5章	利用者がコンタクトを取りやすい位置にスタッフの居場所を配置
	5章	気軽なカウンセリングができる	5章	個室ではなく「中間的な空間」などでカウンセリングができる
	4章	作業や勉強など自発的な活動ができる 例：編み物、語学学習、仕事		
	2章	交流が強制的でない		
	3章	スタッフと利用者の距離が近く、食事や休憩でカフェを利用する		
高齢者	2章	健康維持など自分のためになるプログラムがある	3章	歩行器や車椅子が通れる通路幅と、可動イス
	5章	住宅などのプライベートな用途ではなく、デイケアなどパブリックな用途の方が参加や交流が起りやすい	5章	高齢者デイケア、シニアホームから簡単にアクセスできる、繋がっている
	2章	講師や祖父母代わりなどボランティアで社会参加できる		
子供連れ	4章	子供向け、親向けのプログラムがある	5章	子供に操作できないドア
	4章	小さい子供がウェルカムな雰囲気	5章	幼稚園とデイケアからMGHへの住み分け
	4章	子供が家族以外の様々な人と触れ合える機会がある	5章	ベビーカー置き場がカフェまでの動線上で目に付く場所にある
			4章	安全な外部空間で子供が思い切り遊べる
			4章	授乳室やおむつ台、子供イスなどの設備がある
若者	2章	就業のためのサポートが得られる	4章	カフェや食堂として気軽に使える
	4章	インターンやボランティアで社会経験が積める		

まとめると、**高齢者のみ、子供連れのみ**に当てはまる**要因よりも全ての人に当てはまる要因が多かった**。また、利用者とスタッフの関係や高齢者向けの用途とカフェの接続など、ソフトとハードが**連動している項目もあり、どちらか一方だけでなく両方合わせて計画する必要があることがわかる**。

第6章 結論

6-1 まとめ

表 5-9 に、多世代の交流に関する要因を示したが、建築計画の指針として改めて建築計画の用語に沿って簡潔に記す。

配置・動線計画

- 異なる世代向けの用途の中心にカフェやパブリックリビングを配置する。
- 幼稚園や子供向けデイケアはカフェから離すか、扉で区切ることで子供達が安全に過ごせるとともにカフェの利用者も煩わしくない。
- シニアホームや高齢者デイケアのカフェへのアクセスはよく、また直接つながってなくても窓越しに子供たちの様子などが見られると良い。
- 新しいプログラムやボランティアの募集など、MGH の情報を掲示する場所はなるべく多くの人が通る場所と、外部からも見える場所に設

置する。

用途

・シニアホームやサ高住など、プライベートな要素の強い用途よりはデイケアなどパブリックな用途の方が人は集まりやすい。

・用途も重要だが、それだけでなく PC 教室や認知症ケア、ベビーマッサージ、健康維持など各世代のニーズに応じたコンテンツも非常に重要である。

外部空間

・子供が安全に遊べる外部空間があることで、子供だけでなく親もリラックスして楽しめる。安全に、とは怪我をしないということだけではなく、子供が勝手に敷地外に出ない、親の目または人の目が届く、犬が走り回らない（ドイツではリードを付けずに散歩する飼い主が多い）ことである。

・緑豊かな庭があると、外でお茶や会話をを楽しむ人が増え、MGH がより街に開かれた集いの場となる。

多様な領域

・空間の多様性は利用者とそこで行われる行為の多様性につながる。

・屋内外の良さを兼ね備えた中間的な空間では、食事だけでなく遊びや学習、待ち合わせなど多様な行為が行われる。

・透明度の高いガラスで続き間を区切ると、イベントや人数の増減に応じて連続させたり区切ったりして使える。

・眺めの良い庭や緑道に面した部分はガラス張りにすることで、室内にしながら豊かな外部環境を楽しめる。一般的な街路に対しても、ある程度開くことでカフェの集客や利用者の増加につながる。

・室内も均質である必要はなく、様々な家具を配置したり他と違った場所を作ったりすることで他にない使われ方、行為が行われることがある。

家具

・大きなテーブルと可動イスは複数の利用者によって使われ、交流に適している。ただし積極的な交流を求めている利用者もいるため、様々な種類や配置の家具が必要である。

・カウンセリングには、「中間的な空間」と可動イスや丸テーブルが適している。相手と向かい合うのではなく、垂直に向くことで互いにリラックスできる。

6-2 今後の展望

本研究では、MGH の「開かれた集いの場」というコンセプトに着目し、カフェ空間が特に重要な役割を果たしていると予想して定点観察とアンケートによる調査を行った。その結果から多世代交流に関する要因をソフト・ハードの両面で発見した。調査の際にはアンケートと共に利用者にお話を伺っていたが、特に高齢者に英語が通じないことが多く、断られたり意思疎通ができなかったりして利用目的やグループの関係など分析に役立つ情報が得られないこともあった。より具体的な計画指針を得るには、コミュニケーションの方法を工夫し、さらに多様な事例を収集する必要がある。

また日本とドイツの都市形態や人口統計などを踏まえて比較するとより実用性の高いデータとするため、日本においてどのように実践できるかという点についても今後検証していきたい。

注釈

1) 上田有里奈:ドイツにおける新たな家族政策と多世代ハウスプロジェクト, 同志社大学経済学論文, 第 66 巻 3 号, p72~110, 2014

主要参考文献

BMFSFJ: Where people of all Generations meet. The Action Programme Multigeneration Centres II, 2015
Mehrgenerationenhäuser wirken: Bei den Menschen, im Quartier und in den Kommunen, 2014
BMFSFJ: Mehr Generationen Haus Wir leben Zukunft vor, <http://www.mehrgenerationenhaeuser.de/>, 2017

BMFSFJ=Bundesministerium für Familie, Senioren, Frauen und Jugend の略で家族省を表す